

希望の確率

癌シリーズ ③

高木徳一

一、棚ぼた・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3

二. 封印 36

三. 選択 89

四・謝恩……………32

あとがき・・・・・・・・・・52

著者略歴・・・・・・・・・・・・・・54

一、棚ぼた

師岡誠五十七歳は、五月銀行理事の融資本部長である。頭取秘書からの電話が鳴った。「頭取がお呼びで御座いますが、ご都合の方は如何でしょうか」「大丈夫です。今直ぐお伺い致します」「判りました。お伝え申し上げます」誠は受話器を置くと、入力中の月報の画面を上書き保存でクリックした。「頭取室に行つて来る」と、前に座っている夢野嬢に告げ、ドアを開け、一階上の八階まで螺旋階段を昇った。途中、長身の偉丈夫は細目の上の脳を回転させる。この所、融資本部の実績が思わしくないのです、お小言頂戴か、その対策はどうなっているのだとの質問だろうと想定した。開け放たれた頭取室のドアをノックし、「お邪魔致します」と、頭を深く垂れた。「どうぞ」野太い声がした。

創業者から五代までの歴代頭取の顔写真が見下ろ

す豪華な広々としたデスクから眼を上げた舟山頭取が、高い背もたれの付いた椅子を四分の一回転させ、立ち上がる。横幅のがつしりした頭取は、ドアを開め終わると、応接用の椅子に腰を落とした。通常、業務の話の場合は、ドアは開いたままである。閉めたと言う事は、個人的な事か、人事の件だと誠は直感した。

「君も座りたまえ。どや、仕事の方は・・・」「申し訳ありません。ここにきて、前期、今期とも融資額とその回収額が目標の八十%しか達成出来ません・・・」「そうねえ。以前は君の努力で目標を軽く突破して貰っていたがね、その原因は何や」「バブルが弾けて日本中の経済活動が停滞しておりますので、大口の融資先が中々見付かりません。仮に有ったとしても、焦げ付きを考えると安易に融資出来ませんので・・・」「総論的な事を言わんといてーな、君。具体的事例だがね」角ばった顔の狸目が狐目に吊り上り、語気が鋭くなった。「と申す

しますと・」「個別の大口の回収状況だわな」「石狩造船の方は十五億円の融資で、回収率は三十%であり、空知自動車の場合は十億円を貸付して二十%の回収です。それに・」「そこは判つとるや。」

君の嫁さんの一族経営の桂田不動産の件やね」「はい。五年前に融資した八億円は、未だ十%しか戻っておりません。申し訳御座いません」「当行創業時からの取引きで、実際桂田はんには大分儲けさせて貰つたがね。桂田はんの長女と結婚した君にも業績を上げてもらて、出世も早ようしたがな」「重々承知致しております」「最近、桂田はんも大分資金繰りに困つてられるそうだね。君も心苦しゆうと思うがね。身内にはどうしても強く言えんもんや。おっちゃ、きつついわな。どうでつしやる、この辺で後進に道を譲つて貰えんやろか」「誠は一縷の望みであつた頭取への階段が一気に瓦解するのを、ぼんやり眺めている様だつた。一段一段、後戻りせず昇つて来た階段で人生最大の挫折を初めて味わつた。

「どや、師岡君」と肩を揺すられ、ドスの効いた大阪弁が誠の心を砕いた。我に返つた誠は、か細い声になる。「この半年余り、桂田不動産の件では大変ご迷惑をお掛けし、悩んでおりました。色々世話になつた義父には回収を強く迫りませんでした」「その気持ちは十分判つとるや。君には今までの経験を生かして人材育成や研修を担当して貰えんやろか」「判りました。後三年ご奉公させて頂きます。精一杯頑張ります」「わてらも、ここ三年減収減益続きやで、親銀行から何時首を宣告されるか、ヒヤヒヤもんやわ。サラリーマンは辛いもんだわな」「頭取は本音では誠を解雇したいのだが、かつての功勞者であるので無下に出来無い。」「お互い、今を精一杯生きるしかしやあないな。手間取らせたなや。じゃあ、よろしく」「失礼致します」ドアの外に出ると、新宿超高層ビルがビルの谷間に見え、その超高層ビルが崩れ落ちる幻想に囚わ

れた。エレベーターの先のドアを開け、螺旋階段を力無く下りる。半分はさばさばした様な、半分は無念さの残りかすが占める。フツと目眩を覚え、手摺りに掴まると、地下からの微光が瞬く間に上り来る。記憶細胞が脳から一斉に飛び出し、白壁にベタベタと時系列に貼り付く。その一つ一つを微光が浮かび上がらせてゆく。

誠二十九歳は、初代頭取長谷熊吉の前に居る。「呼んだのは他でもない。仕事の話では無いんじやが・・・」人一倍縦長の顔をした黒髪（染めの噂あり）の頭取が身を乗り出す。「・・・」実はな、良い話が舞い込んだのじやよ。取引先の桂田不動産を知っておるじやろ」「噂には聞いております。飛ぶ鳥を落とす程の会社だと・・・」「そうだ、裸一貫で埼玉県から東京に出て来て、一代で財を築いた桂田五左衛門さんじやよ。昨日、ここに見えられて、君と娘を見合いさせたいのでは非勞を取って

欲しいと言われるのじや。上得意先でもあるしな。君の意向を聞きたいと思つて。これが彼女の写真と履歴書で、返事はじっくり考えた後でいいんじやよ」

まさか、頭取室で入社七年目の青二才が見合い相手を紹介されるとは、青天の霹靂であつた。どう、答えてよいのやら、誠の心は大波を食らっている。

「君は幾つになるかね・・・」「二十九歳です」「そうか、いい年頃じや。所帯を持つて仕事に全力を尽くす時機だと思ふがね。所で、君には約束した女が居るんじやろ」「いえ、おりません」「いいんだよ、遠慮無く言つてくれて、二人だけの秘密だから」と頭取は言いつつ、時折り、顔を小刻みに震わせる。「本当におりません。仕事が面白くて結婚なんて考えていません」「男は結婚して一人前と言う社会の風潮があるじやろ、ましてお堅い銀行員ともなると。良縁とは思ふがね。僕が結婚する訳じゃないが。当人とお会いした事も無いので、

人柄は分からず、無責任な事は言えんがね。一度会つてみたらどうじゃな」

頭取は仲人二十組目標に後一組と迫っていたので、成立させたいとの願望が強い。

「分かりました。暫く、お時間を頂きたいと存じます」「そりゃあ、そうじゃとも。君の一生の問題じゃ」

誠は丁寧なお辞儀をしてドアを後にした。エレベーターで二階に戻り、茶を飲み込む。

あの一件は頭取といえども話す必要は無いと決断した。

午後は外回りした預金の整理が残っていたが、一万円札が手にまとわり付き、サッサと数え切れない。心の揺れが手先にも移ってしまった。落ち着け、落ち着けと自分に言い聞かせるのだが、一層鼓動は激しくなる。終業の五時半が迎えに来るのが、何時もの倍近く感じられた。普段と違ってべルと共に席を立つ。

ビル前の新宿御苑のバス停から乗り込み、渋谷行きで途中の戸山町で下車した。坂を下った所に、三階建ての独身寮ビルが東側に、西側には一軒が一、二階使用出来るモルタル造りが南向きに三十軒分連なる。北側に目を遣ると、樹齡二、三百年もの樫や椎の太木が天を圧する。独身寮の東には、四面のテニスコートが在り、誠は入社以来、硬式テニス部に所属し、そこでプレイを愉しんでいる。寮の表玄関に入り、箱から夕刊を取り、南棟三〇五号室に向つた。ドアを開け、素早く寛ぎスタイルになつて、一階西端の風呂場に入る。浴室はガラシとしていて、一番湯は初体験となる。大きな湯船に、平均的日本人よりかなり長い手足を伸ばせるだけ伸ばした。頭取の話は夢ではないのか。・彼女の写真と履歴書を靴から出し、机の上に置いて来たばかりだから、幻では無い。

そうか、あれは確か半年前、先輩が風邪で一週間寝込んだ為、代理で桂田不動産を訪問し、二百万

続きは
完成版で
お楽しみ下さい。